慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	D・H・ロレンス『恋する女たち』「プロローグ」章
Sub Title	D. H. Lawrence, The 'prologue' chapter of the fifth version of Women in Love
Author	武藤, 浩史(Muto, Hiroshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2018
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.139 (2018. 2) ,p.202(91)- 226(67)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	朝吹亮二先生退職記念特集号 = Theses in honour of the retirement of professor Asabuki, Ryoji 翻訳
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000139-0226

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

翻訳

D・H・ロレンス『恋する女たち』「プロローグ」章

武藤浩史

まえがき

二〇世紀前半の英文学を代表するD・H・ロレンス（D.H. Lawrence, 1885–1930）の傑作小説『恋する女たち』（*Women in Love*, 1920）の制作過程は錯綜をきわめるが、それを簡潔にまとめれば、次のようになる。一. 一九一三年三月から六月にかけて（仮題『姉妹 *The Sisters*』）、二. 一九一三年八月から一四年一月にかけて（仮題『姉妹 *The Sisters*』）、三. 一九一四年二月から五月にかけて（仮題『結婚指輪 *The Wedding Ring*』）、とまずは三回書かれ、四. 一九一四年一一月から一五年五月にかけて、その前半部分が『虹』（*The Rainbow*, 1915）という独立した小説として完成された後、再び、残りの部分が、五. 一九一六年四月から六月にかけて書き直され（仮題『姉妹 *The Sisters*』）、さらに、『恋する女たち』として、六. 一九一六年七月から一七年一月にかけて、そして、七. 一九一七年三月から一九年九月にかけて、執筆された。計七回、書き直されたことになる。

今回、訳出したのは、その内の五回目の執筆時に、小説冒頭章として、多分一九一六年四月に書かれた部分で、そのホモエロティックな内容は、小説『恋する女たち（ウィメン・イン・ラブ）』の中核に「恋する男たち（メン・イン・ラブ）」の要素がしっかり埋め込まれていることを最もはっきりと示している。（あるいは、仮題『姉妹 *The Sisters*』が男性間の同性愛の隠喩であることも示唆する。）そして、恐らく、その同性愛的要素ゆえに、第六稿（『初稿恋する女たち（ザ・ファースト・ウィメン・イン・ラブ）』として作者の死後一九九八年に出版）、第七稿（『恋する女たち』決定稿として一九二〇年に出版）では削られた。

この部分が『恋する女たち』の「プロローグ」として、初めて発表されたのは、一九六三年の『テキサス・クォータリー』第六巻である。編者はジョージ・H・フォード。本文の前に、編者による六頁ほどの序文が付されている。「プロローグ」は、その後、ロレンスの遺稿集『不死鳥Ⅱ』（*Phoenix II*, 1968）に再録された。この遺稿集は全訳があり、その中に内田憲男氏による「『恋する女たち』のプロローグ」（本邦初訳）収められている。

今回の翻訳に際しては、ケンブリッジ大学出版局版D・H・ロレンス全集中の『恋する女たち』（*Women in Love*, 1987）に収録されたテキストを使用した。二回目の翻訳ということもあり、初訳よりもこなれた訳でなければ意味はないわけだが、いかがだろうか。読者諸賢の判断を待ちたいと思う。

本訳は敬愛する朝吹亮二先生に捧げられる。

参考文献

Ford, George H. 'An Introductory Note to D. H. Lawrence's Prologue to *Women in Love*.' *Texas Quarterly* 6 (1963): 92–97.

Lawrence, D. H. *The First "Women in Love"*. Ed. John Worthen and Lindeth Vasey. Cambridge: Cambridge UP, 1998.

——. 'The "Prologue" and "Wedding" Chapters.' *Women in Love*. Ed. David Farmer, Lindeth Vasey, and John Worthen. Cambridge: Cambridge UP, 1987.

487–518.
—. 'Prologue to *Women in Love* (Unpublished).' Ed. George H. Ford. *Texas Quarterly* 6 (1963): 98–111.
—. 'Prologue to *Women in Love*.' *Phoenix II: Uncollected, Unpublished, and Other Prose Works*. Ed. Warren Roberts and Harry T. Moore. New York: Viking Press, 1968. 92–108.
D・H・ロレンス「『恋する女たち』のプロローグ」内田憲男訳、『不死鳥Ⅱ』吉村宏一他訳（山口書店、一九九二年）、一二九―五四頁。

『恋する女たち（ウィメン・イン・ラブ）』の中の「恋する男たち（メン・イン・ラブ）」――未刊の第五稿冒頭章「プロローグ」

武藤浩史訳

通りいっぺんの付き合いだったのに、ふたりの男の間には、ふしぎな結びつきがあった。

はじめて会ったのは四年前で、海軍に勤めるホスキンという共通の友人に紹介された。チロルの山に登って、ルパート・バーキンとウィリアム・ホスキンとジェラルド・クライチの三人は、一週間をともにした。

バーキンとジェラルド・クライチは出会った瞬間に、まったく異なる気質の男の間で時折、不意に生まれる特別な繋がりを感じた。それぞれの心の奥底で、燃えあがるものがあった。相手を見ると、震えるような近さを感じた。

それでも、ふたりは、少しも、打ち解けなかった。ふたりの関係は、どう見ても、どの点においても、些細で、表面的なものだった。心の奥が燃えていたので、かえって、いつもより、余計、よそよそしくなった。

だが、礼儀正しさの中に、ある種の優しさがあった。よそ行きの堅苦しい振る舞いの裏に、居心地悪い理解が隠れていた。互いの存在を痛いほど意識したし、相手と一緒のときは痛いほど自分を意識した。

登山の一週間は短く濃密な一生のように過ぎた。三人の男はとても親しくなって、雪の岩山に元素のように孤立した。下界の人間活動の一切は底に沈み、どうでもいいものと化した。空近くの静寂と孤独の世界に不法侵入したのだ。三人は、もう一つの存在の境地に達した。空に近い静寂に着火し、言葉のない、表現を超えた、稀な親密さの中に燃えあがった。三人にとって、それは宗教的変容に似ていた。山間で、実体のないふしぎな炎に投げこまれたかのように燃えあがり、互いを知り、互いに知られた。それは別世界、別の生だった。神的変容に似ながら、最も、痛切に、肉体的だった。五感のすべてが研ぎ澄まされ、自分と相手の体の両方を真の炎のように感じた。三人のかがやきはアルプスの高山で、一つの超越する炎と燃えた。

それから、急に地上に戻り、炎も消えた。三人はインスブルックで別れて、バーキンはミュンヘンへ、ジェラルド・クライチとホスキンはパリ・ロンドン行きの汽車に乗った。駅では、彼らが体験した日常生活を超えた親密さについては一言も触れず、おくびにも出さずに握手して別れた。普通の知人が別方向に分かれるときのように、握手をして、あっさりと別れた。それでも、バーキンとジェラルド・クライチは、そのとき、ふたりの間に交わされた絶対的直観を、別れのときの互いのまなざしの中に認めた気づきを、片時も忘れなかった。ふたりは愛しあっていて、相手のために死ぬ覚悟さえあった。

それでも、そのすべてはふたりの魂の奥深くに秘められた。外には、わずかたりとも認めようとしなかった。身を硬くして、その話題を避けた。ふたりは、かえって、普通以上に、あっさりと、冷淡に、別れを告げた。

それから、一年間、ふたりが会うことはなかった。言葉を交わすこともなかった。互いの生活から姿を消して、表面上

は、忘れ去った。

だが、ダービーシャー州の屋敷で再会すると、ふたりの感じやすい心にまた火がついて、ふしぎな気まずい炎と化した。互いをほとんど知りもしないのに、この秘めた、ふしぎな、激しやすい親密さがふたりの間を流れているので、ふたりは落ち着かなかった。

だが、ルパート・バーキンには、とても強い自分があって、誰に対しても絶対に自分の魂を委ねなかった。結局は、自分にしか責任を持たない孤立した男で、他者の魂と交わることをしなかった。だから、ジェラルド・クライチの魂は乱されなかった。

ふたりの男はとてもちがっていた。ジェラルド・クライチは、金髪碧眼で眼力鋭い中背の男で、機械のように筋肉が硬くエネルギーに満ちていた。狩人で、旅人で、兵士だった。休むことを知らず、いつも精力的で、目下の者に指示を与えていた。

他方、バーキンは、静かで、目立たなかった。背が高く、とても痩せていたが、骨ばかりというわけではなく、鋼線に似て、引き締まっていながら、しなやかさがあり、静かな落ち着きにあふれていた。力が表に出るタイプではなく、受身で、弱々しい小物にさえ見えかねなかった。病気にもよくなった。血色の悪い、どちらかと言えば醜い顔で、茶灰色の髪をして、黄灰色の瞳が生き生きとして、とても温かかった。大概の相手には、そのとても温かく急に変化する魅力的な目だけが心に残った。炎のように生き生きした瞳だった。だが、バーキンのこの主たる美点は、偽りだった。彼を最もよく知る者は、その美しい瞳が、実は狼の目に似て人と交わらず、打ち解けることもないことを知っていた。本当の彼は、無情で、無感覚で、自信があった。一方の、ジェラルド・クライチは、心の底では、いつも揺れていて、居場所が見つけられなかった。

ふたりが滞在していたのは、チャールズ・ロディス卿の屋敷だった。ジェラルド・クライチは卿の友人として、ルパート・バーキンは卿の娘ハーマイオニ・ロディスの友人として招かれていた。チャールズ卿は、逞しい体で際立って保守的な気質のイングランド人ジェラルド・クライチが娘と結婚してくれるといいと思っていた。ジェラルドにはかなりの資産を相続する見込みもあった。だが、彼はハーマイオニに興味がなく、ハーマイオニもジェラルドを嫌っていた。

彼女は二十五になる美しい女性で、色が白く、背が高く、ほっそりとして、気品に満ちていた。少なからぬ学識もあった。ルパート・バーキンとはオックスフォード大学で知り合った。バーキンが一年先輩だった。彼はオックスフォード大学モードレン学寮の教員で、すでに二十一のときから将来を嘱望される大学期待の星だった。教育学の論文が高い評判を呼んで、視学官にも選ばれた。

ハーマイオニは彼を愛していた。五年前の、二十歳のころ、政治経済学を専攻していた彼女は、ブラックホース通りの自室でニーチェ批判を熱く弁じたてる二十一の彼の話を聞き、大学での彼の高い評判もあわせて耳にして、彼の名前と名声に自らを捧げることにした。彼の精神的・霊的火炎のなかに、身を挺して跳びこんだ。

チャールズ卿は、ふたりが結婚するものと思っていた。だが、バーキンが来る年も来る年もぐずぐずして、自分の気持ちをはっきりさせずに、娘の結婚のチャンスを台無しにしていると思いこんだ。武人の父はかなり苛々した。だが、物静かでいつも物腰の低いバーキンを幾分恐れてもいた。考えを聞くためにバーキンと直接話してみようと娘のハーマイオニに言うと、娘は顔を真っ青にして、父親をさげすむように、傲然と憤った。卿は途方にくれて、怒りを内に含みながら、沈黙を余儀なくされた。

「お父さんは、何て俗っぽいの！」娘が叫んだ。「彼に一言でも何か言ったら承知しないわよ。彼とは友情で結ばれているの。こんな邪魔立てはさせないわ。お父さんは、どうして、わたしを結婚させようとそんなに焦るのかしら。わたし

は、今のままで、とっても幸せなのに」

彼女の灰色の瞳が、激情と苦しみと黒い憤りにうるんだ。美しい顔が引き攣って、陵辱された女預言者のようになった。父は、立腹しつつも、冷然と退いた。

このようにして、ハーマイオニとバーキンの関係はつづいた。彼は視学官になり、彼女は教育学を勉強した。彼はまた、辛辣な不協和音に満ちた詩を書いた。とてもリアルで、暗鬱で、彼女は苦しんだ。時折、彼がもっと底の浅い、優しい抒情詩を書くと、彼女は、それを干天の慈雨のように、大事にした。彼女は、巫女のように、彼の言動や「ご託宣」を記録した。彼はきちんと崇拝しないと無に帰してしまう神のようだった。

ハーマイオニには、ふたりの男の間の愛情が理解できなかった。男たちは、夕方になると、広間に座って、世間話をした。バーキンはジェラルドとの会話の何が面白くて彼と話すのだろうか？　彼女自身は、ただ退屈して、何を話していいか当惑するだけなのに、ふたりの男は、たわいもないことを喋って、幸せそうだった。ハーマイオニは苛々した。ハーマイオニには分かっていた。バーキンは、いつものように、彼女の目にはくだらなく映る、彼の価値を傷つけ減じさせる低俗な交際のために、自分の頭脳と才能を小さく見せているのだ。どうして、彼は、いつも、嬉々として、俗人のレベルまで身を落とすのだろう？　どうして、彼は、いつも、いそいそと、自らを俗にまみれさせることで、自分を裏切るのだろう？　彼女は、煩悶のあまり、唇を噛んだ。彼は、まるで、自分の持つ繊細で貴重な才能のすべてをすすんで否定したがっているようだった。

バーキンには、彼女の気持ちや考えが分かっていた。それでも、わざと彼女を傷つけるみたいに、ジェラルドとの付き合いをつづけた。彼は、彼女とのほとんど宗教的な交際の高尚さと深遠さを、どうしても裏切りたかった。神たる彼は、くるりと振り向くと、彼の巫女たる彼女に襲いかかり、女をさげすむ卑俗な男になった。その魂はふしぎな変容を遂げ

て、神的気配に激しく燃える純粋に光りかがやく霊から、あらゆる当たり前の欲にまみれた底の浅い詰まらない男になった。仕返しをしてやろうという気持ちさえあった。あざけるような悪意と耐えがたい卑賤があった。彼女は気が狂いそうだった。彼女は男に自分の震える裸の魂のすべてを与えたのに、相手はやくざな男に堕してしまい、居直っていた。彼の中に、俗悪に、卑賤に、いささか下劣な男になりたいという深い欲望があった　手を差し延べて懇願する彼女に、彼が投げつける卑しいあざけりの視線は、耐えられなかった。まるで、ドブネズミに噛まれたようで、彼女は発狂しそうになった。古(いにしえ)のサンダルを履き喪に服すローブをまとい墓で待つ霊的な女を、彼はあざけった。彼女の心の秘密を知った上で、彼は女をひどくあざけった。もう正気ではいられない。女には自分が発狂しつつあることが分かった。

それでも、彼は、ジェラルドとの親密な友情の中に、意気揚々と飛びこんでいって、女を仲間はずれにし、女を苦しめた。彼は相手に対する合わせ方を知っていた。だから、自分の頭の波長をほとんど寸分の狂いもなくジェラルドの頭に合わせ、彼一人では考えられない部分をちらちらと照らしてやって、あまり頭の良くない相手にこの上ない冒険と解放の感覚を味わわせてやった。男たちは、ふたりで、何時間もしゃべっていた。バーキンは、自分の知らない国を旅してきたジェラルドの硬い四肢と強張(こわば)った顔をながめた。ジェラルド・クライチは、向かい合ったバーキンの白くかがやく顔を見つめた。魂にとって未知の森の入り口に佇み、新しい知に震えながら、新しく生まれ変わる時、バーキンの瞳はきらきらと光った。

ハーマイオニにとって、ルパート・バーキンがジェラルドとの付き合いで、自分の知性を汚して相手の愚鈍さに合わせるのは、弁解の余地なき堕落だった。彼女はどう考えていいのか分からなくなった。彼女は狂気の淵を漂流した。いったい、どうして、こんなことを？　空にかがやく汚れなき星の如き指導者たる彼が、いったい、どうして、最低の裏切り者にして最悪の冒瀆者に？　ハーマイオニは、頭がくらくらして奈落の底に落ちる思いで、こめかみを押さえた。

少なくとも、今のところは、ハーマイオニとの精神的な交際よりも、ジェラルドとの付き合いの方が、バーキンを満足させた。ジェラルド・クライチと関係を持つことが嬉しかった。自分に付きまとうこの四肢を持つ旅する運動家を、より大きな優れた知性の虜にするのは、達成感のある仕事だった。バーキンは燃えるような欲望を、ジェラルド・クライチのより単純な頭脳とより小さい魂と何も分からずにもがきつづける体に対して抱いた。ジェラルドも、理解できないまま、喜びにみなぎった。彼は自分がバーキンを愛していることさえ知らなかった。相手のことを、すばらしい尋常ならざる知性に恵まれながらも、情けない虚弱な体に呪われた男だと思っていた。より優れた肉体の持ち主として、相手に対して大いなる優しさを感じた。と同時に、バーキンの繊細で洗練された在り方を崇め奉った。

それでも、高らかに友情が宣言されることもなければ、あけっぴろげに親密さが示されることもなかった。どう見ても、ふたりが通りすがりの単なる知り合いであることに変わりはなかった。ふたりが交わったのは、潜在意識という名の別世界においてのことだった。そこでは、それぞれの男の状態に本質的な変化をもたらすことなく、心身ともに、豊穣なやりとりが行われ、貧しさが解消された。

ハーマイオニには、まったく理解できなかった。彼女は大いに傷つき、絶望した。バーキンに裏切られると、彼を軽蔑して、厭悪の情を抱いた。彼に対する不信に、彼女の魂は芯まで突き刺された。男の精神性の激しく純粋な炎がここまでひどく墜ちるものならば、愚鈍なジェラルド・クライチの前にはいつくばる薄汚れた熱と堕するものならば、ジェラルドのような粗野でがさつな有象無象の輩すべてへの媚びへつらいと化するのであれば、信じられるものは何もなくなる。光りかがやく天上の星が、その翌晩には、腐臭と燐光を放ち、栄光と堕落が互換可能となる。ハーマイオニの魂は絶望に打ち震えた。彼女は自分の神と天使を蔑んだ。だが、それでも、彼なしには、やっていけなかった。巫女としての自分を信じていて、ただ、それしかなかったのだ。仕える神がたとえ存在しなくても、彼女は巫女だった。それでも、ろうそくを

点す祭壇も、屠るべき生贄も失われれば、不毛で無用な存在になるだろう。だから、彼女は、彼の中に見た神を、自分のものとして激しく求め、そこにすがりついた。その一方で、彼の中の男妾性に対しては、苦い絶望とともに、顔をそむけた。彼女はバーキンを信じていなかった。ただ、腐った虫からも絹を取ることができるように、彼から得られるものは信じていた。こうして、彼女は神を創造した。

だから、数日後に、ジェラルド・クライチが屋敷を辞すると、バーキンはハーマイオニ・ロディスに委ねられた。たしかに、クライチはバーキンに「近くを通りかかったら、わが家にも遊びに来てください」と言い、バーキンもうなずいたけれども、あえて「遊びに」行くことは決してない、ということも、なぜか前もって分かっていた。

体調を崩し、心細くなったバーキンは、ハーマイオニの元に戻った。銀色に光る丘々を見わたす庭園の夕べに、彼は、彼女の側に座ったり、その胸に頭をのせて寝そべったりした。月の光が木々を優しく照らす中で、ふたりは新たに生まれる露のように、そっと、優しく、語り合った。ふたりの声だけが、白銀の大気に純化され、幽霊のように、さまよい、また、止まった。ふたりは生死について、とりわけ死について、語った。男の言葉は急に揺さぶられてきらめく闇の中の水のように、ふしぎな燐光を放った。その間、女は男の頭を胸に抱き、その重さに限りなく満ちたりていた。女は絶妙の手つきで、優しく、細やかに、男の髪をなでていた。女の手は蝶のように細かく震えながら、男の髪に触れるか触れないかのところを、軽やかに、繊細に、リズミカルに、行ったり来たりした。男が女に感じた息が詰まるほど優しい気持ちはほとんど耐えがたかった。女も話しつづける男の声に貫かれて、気絶しそうなくらい強く抱擁されている心地だった。女はずっと男の虜だった。男の精神の虜だった。美と刃のように鋭い完璧なエクスタシーの、非の打ちどころない均衡の感覚に、女はこの世を離れて、我を忘れた。

このような極上の忘我の美しい夜に、すべてが白銀の月光の炎に焼き尽くされ、魂も月夜の冷たく燃える大かがり火に

放りこまれた後に、朝が来て、灰が残った。男の体も焼き尽くされて灰色になり、その魂も調子をくずした。冷え冷えとした白銀の死の夜こそが美しく非の打ちどころのない究極の現実の王国という時に、日がのぼり、熱く陽気な花が咲くことに何の意味があるだろうか。

女の方は、巫女らしく、満たされて、豊かになった。だが、男は、より空ろになって、見た目も骸骨のようにやつれた。逃げ道はなかった。ふたりは、死の世界を奥へ、奥へ、進んでいった。じきに、生との繋がりが切れてしまうことが予測できた。

すると、女への嫌悪が、男の中に起きた。苦しみにあふれる愛で、懊悩におおわれた優しさで、またある時は、この世のものならぬ白い忘我の体験を通して、女を愛した後で、男は猛り狂った犬のようになって、女に襲いかかった。女は、生贄のために引き裂かれる巫女のように、じっと耐え忍んだ。たとえ、周期的に、猛犬と化して、自分を引き裂く神であっても、彼女は自分の神に身を捧げようと心に決めていた。

男は立ち去ると、自分の仕事に没頭した。一心不乱に教育を研究した。徐々に分かってきたのは、教育とは意識の或る部分を完全に組み立てる過程以外の何物でもない、ということだった。そして、それぞれの部分が、最終形を生物が求めてゆくように、人類がせっせと骨を折りながらそこを目ざして成長してゆく社会的・宗教的・哲学的な一大理想の生きた一部になるはずだった。だが、もし、そういった一大理想が存在しないのであれば、今は人類の成長期ではなく、すでに役目を果たして時代遅れになった過去の理想から腐敗がはじまり崩壊してゆく時期なのだとしたら、いったい、教育の意味とは何になるのだろう？　腐敗と崩壊はそれなりに必然的な道をたどりゆくもので、それを目的とする教育はできない。すでに役割を果たして無効になったものからいかに滅びゆくのかを人びとに教えることはできない。秋は、すべての人びとのみならず、個々人にも、かならずやって来る。個人も、社会も、すべては滅びゆく。しかるに、教育というもの

は、力を合わせ、心を合わせて、新しく生まれ変わろうとすることだ。一つのまとまった健全な生の形を求めることだ。だが、冬の季節が始まって、霜が木の枝の葉を枯らし、鳥たちももの言わぬ闇の塊と化してしまったというのに、どうして、花咲き乱れる明るい夏に向けて、心を合わせて頑張れるというのだろう？　人類に訪れたこの冬の間にできるのは、死の流れに身をゆだねて、これからも長いこと明かされない謎にとどまるであろうこの未知の何かを胸に抱くことだけだ。その未知の蕾がほころぶのは、死の季節がようやく終わった遠い未来のことになるだろう。

バーキンには、人びとをまとめて立派な社会を築こうとするすべての教育的試みの根本的な空しさが見えてきていた。冬の季節に可能なのは、解体の一斉性だけだった。葉が一斉に落ちて、草木が枯れ果て、一匹一匹、一人一人が、静かに眠る墓となる以外に、手はなかった。それは、夏の間はまだらな闇の光のようにさまようクサリヘビやヤマネが、冬になると、夏の自分の柔らかな墓と化すのと同じことだった。

この頽廃のプロセスからいかに身を引くか、この誰も認めようとしない、燐光放つ死への一斉行進をいかに逃れるかということこそ、昼に、夜に、バーキンを無意識裏に苦しめた問題だった。ハーマイオニの元に行くと、彼女のところには、死そのものの忘我の半透明の純粋な領域が広がっていた。秋の季節が、世界で、始まっていた。男は何に身を捧げればいいのだろうか？　科学か、社会改革か、唯美主義か、感覚主義か？　世界中の建設的な活動が偽りなのに。それはすでに始まってしまった腐敗の偉大な流れを隠すための嘘にすぎなかった。それでは、何を信じればいいのか？

彼は、死から死へとさまよった。仕事が信じられなくなり、それでも仕事をするのは、ひどく辛く、苦しいことだった。視学官として学校を回って、報告書を書いたり、指導したりすることを考えると、身の毛がよだった。彼の魂にとって、それは何から何まで不毛な仕事、少しばかりの意味もない機械的な作業、まったく根無しの、偽りだらけの成長だった。そして、偽りの、根無し草の、痙攣的な活動の恐怖が最も痛感されるのは、教育の領域だった。何もかもが、精神の

崩壊のように感じられた。吐き気がこみあげ、恐怖におののいた。彼はさっと身を縮めて、逃げようとした。だが、何を信じて、何をすればいいのかが、分からなかった。

私生活でも、同様の不毛さと間違いの恐怖に付きまとわれた。宗教であれ、哲学であれ、思想というものはどれもこれも、意味のない音の羅列か、古臭い昔からの繰り返しか、古い同じ材料を目新しそうに、小賢しく、それらしく組み替えたものに過ぎない。だが、そのような知性と意識の産物に過ぎない思想を除くと、人間の生に何か、残るものがあるのだろうか？　人間には感情と感覚の活動だけで十分ではないのだろうか？

バーキンは狂気のようにびくっと跳びあがった。彼の苦悩の核心がそこにあったのだ。ハーマイオニへの愛のすべては、忘我と苦しみと究極の死に根づいていた。その愛に生へ向かう創造的な要素が欠けているのは、自分でも分かっていた。彼は彼女を欲望さえしなかった。女への情熱はなかった。ふたりの間には、成長しようとする熱い衝動でなくて、この燐光放つ意識の解体に向かう恐ろしい活動だけがあった。意識がどんどん虚無のなかに解き放たれてゆくと、その犠牲になった肉体は燃え尽きて、火の消えた灰になった。

これが愛とは思わなかった。だが、彼は彼女に縛りつけられていて、彼女と別れるのは拷問に等しかった。他の誰を愛しているわけでもなかった。愛する女はいなかった。誰かを心から愛したかった。それでも、愛したいという気持ちと愛するという行為の間には、生と死ほどのちがいがあった。

愛せないこと、女を積極的に、全身全霊で欲望できないことが、本当に辛く心底苦しかった。自分より大きな力に動かされることもなく、自然に、素直に人を愛せないのは、耐え難かった。いつも自分の管理下に自分を置いて、慎重に選択を重ねてゆく生き方は、死よりも質（たち）が悪かった。それでも、そこから逃げられなかった。人格を超えた、より大きな、否も応もない愛の力に捉えられない限り、冷たい慎重な生き方を避ける術（すべ）はなかった。より大きな力に捕まらない限り、の

びのびと、素直に、自然に生きられなかった。この慎重な人生をつづけてゆく他に手はなかった。

彼はハーマイオニを愛していなかったし、彼女を欲してもいなかった。だが、無理強いでもいいから、かなうことならば、彼女を愛し欲望できるようになりたいと思った。性欲に苦しめられていて、満たされたかった。それでも、ハーマイオニを欲することはなかった。彼女にはむしろ嫌悪を感じた。それなのに、手を伸ばして、肉体的な満足を摑もうとした。性行為に固執した。無理に自分を彼女の方に押しやった。

女ははじめから、どうしようもなかった。それでも、彼に身をゆだねた。心の奥では、間違っているのが分かっていた。それでも、まるで体に欠陥があるみたいな恥の感覚におそわれた。彼女も彼を欲しなかった。だが、全霊をこめて、彼を欲したいと思った。彼が求めるものを与えられるのであれば、どんなことでもやろうと思った。このせいで、彼は猛り狂っているのだ。肉体的満足を執拗に求めているのだ。彼女は賢かった。できるだけ前向きに考えた。彼のために、非の打ちどころない生贄になろうと思った。進んで、自分を彼に捧げ、彼の意のままになった。

ああ、それがこんな惨憺たる失敗に終わるとは。それはまったくの失敗だった。彼が彼女に求めたこの最後の愛の営みはこれ以上ないほどの強い悲しみを残した。無に等しい、虚無に等しい体験になった。彼は彼女から喜びを得ることができずに、屈辱感だけが残った。女の心も悲しみに引き裂かれた。

彼女は、彼が満足を得られるのであれば、自分を抱いて、その情熱で自分を引き裂いてほしい、その欲望で自分を破壊してほしいと思った。震えながら、ある意味では、彼に殺されることを待ち望んで、身を捧げた。彼が満ち足りて身を起こすことができるのであれば、自分は引き裂かれ、ばらばらにされ、命を失ってもいいと思っていた。

だが、彼はできなかった。彼はしくじった。彼女を抱いて、彼女を破壊できなかった。彼女を忘れられなかった。ふたりの間には、あまりにも洗練された精神的な繋がりがあり、彼はそこから身を引きはがすことができなかった。獣が欲を

満足させるために襲いかかるみたいなことができなかった。彼は生贄として横たわる彼女に気を遣い過ぎた。彼女の怖れと彼女のもだえ苦しみが分かり過ぎた。彼女の気持ちを尊重し過ぎた。彼女も激しく求めた破壊と蹂躙（じゅうりん）を通して絞りとる満足を得られなかった。彼には経験が足りなかったし、無情にもなれなかった。いつも彼女の気持ちが分かってしまい、自分の気持ちが失われた。そのため、ふたりの最後の性交は惨憺たる結果に終わった。あまりにも辛すぎて、耐えられなかった。

この失敗がふたりの愛にとどめを刺した。彼は彼女を、愛における無能さゆえに、彼に対する肉体的欲望の完全でほぼ完璧な欠如ゆえに憎んだ。彼女の欲望はどこまでも精神的で意識的だった。感覚は死んだまま、すべて、意識を通して男を欲した。

彼女の方でも、彼を嫌悪し蔑んだ。彼は欲望をぶちまけることもできず、無理やり満足を絞りとる力もなかった。せめて、彼女を抱いて、破壊し、疲れ果てさせた挙げ句、満ち足りることができたのならば、彼女もようやく自由になれたのに。彼女は殺されても構わなかった。むしろ、死こそが彼女の絶頂にふさわしかったのに。

失敗だった。ひどい決定的な失敗だった。彼は素手で彼女を破壊することができず、彼女から望みのものを手に入れることができなかった。女を破壊する力もないというので、彼女にも軽蔑された。

それでも、そのような惨憺たる結果にもかかわらず、ふたりは別れなかった。ふたりの繋がりの根が深すぎた。今では、彼が二十八、彼女は二十七になっていた。今でも、精神の喜びを求めて、意識生活の伴侶として、思索や読書や美的体験の喜びを共有し高めるための伴侶として、風景に知悉しそれを深く享受するための相手として、彼は彼女の元に赴いた。これらの体験のために、今でも彼女は彼と共にいて、彼の人生の大部分を占めた。彼女にとって、苦しくも悔しいことに、今でも彼は彼女の人生のほとんど全ての親鍵（マスター・キー）だった。それは彼女の望む状況ではなく、彼女は彼と彼の支配の恐

るべき奇妙な桎梏から自由になりたいと思っていたものの、まだ自由になれなかった。

彼は、他の純粋に感覚的で官能的な魅力をそなえた女の元に走った。自分の精神を犠牲にすることで、それなりの満足を得た。ハーマイオニは、彼が他の女に走るのを悲しげに見守りながら、心のどこかで、安堵のため息をついていた。自分へのいじめが減るからだった。

彼が自分の元に戻ってくるのは、分かっていた。朝になれば夜が明けるように、彼は必ず、自分のところに戻ってくる。彼は半ば誇らしげに、意気揚々と、半ばは彼を自由にさせたことへの怒りを胸に抱きながら、彼女の元に、親交を求めて、戻ってくる。彼が他の獣に似た浅黒く官能的な女の元に走ったのは、自らを徹底的に堕落させるためのようだった。彼が快感を追求する自己を心底軽蔑することも、彼女には分かっていた。だから、彼の自由にさせた。彼女が耐えがたかったのは、彼の罪人としての下卑た傲慢さに過ぎなかった。彼は、彼女の前で、自分の犯した罪を得々と見せびらかす嫌いがあった。それだけでも、彼女は堪忍袋の緒を切らして、男の不安定な幼児性をなじった。

それでも、これまでのところ、彼がそれなりに敬意を感じてくれていたので、彼女は耐え忍んでいた。彼の心は、今でも、その根本では彼女に仕えていた。彼女もそのような彼の奉仕を慈しんだ。

だが、彼は苛々と、しびれを切らしてきていた。少しおかしくなっていた。心身全体が苛々と異常な熱を帯びてきていて、炎症を起こしていた。まわりが見えなくなり、人生の大半が意識できなくなった。少数の事柄だけが熱を帯びて、異様にはっきり見えた。その間も、彼女は、彼の鍵を握って離さなかった。

ハーマイオニがただ一つだけ怖かったのは、彼の決断だった。特定の事柄だけが熱く、くっきりと見えて、その見えたものに基づいて行動を起こしてしまう彼の癖だった。一度、心に決めると、それが他を圧する普遍的な真理と化してしまい、すっかり人間らしさを失くしてしまう彼だった。

彼としては、自分なりに、自分に対して誠実なだけだった。だが、それぞれの人間にはそれぞれの真理があって、それに対する誠実さがある。ハーマイオニにとって、バーキンが怖いのは、何かあることを信じこむと、いかなる犠牲を払っても、それに従って行動する傾向だった。自分の目が邪魔になると思ったら、自分の目をえぐり出しかねなかった。人間らしさを失い、冷たく抽象的な存在と化して、彼女は心底ぞっとした。彼は怪物とも完全な阿呆とも見分けが付かない、人間ならざる何物かと化すように見えた。彼女のことをえぐり出すべき目だと彼が思わない保証はどこにもなかったのだ。

彼はこの愛と愛の肉体的成就という問題に取り憑かれてしまって、それ以外のことが考えられなくなっていた。すべての思考がそこに集中した。自分の存在の全体性を大事にしていて、どちらか一方をもう一方のために犠牲にするのは嫌だった。精神性のために官能性を犠牲にしたくなかったし、官能性のために精神性を犠牲にすることもできなかった。どちらの領域でも十分な達成を果たせず、双方が互いに常にいがみ合っている状態だった。精神性のためには、ハーマイオニのような、まったく欲望を欠いた女を必要としたが、官能的喜びを求めて、少し獣じみた女なしでもいられず、じきに、そういう女の肌の匂いや振舞いが耐え難くなって吐き気をもよおすようになると、また、ハーマイオニのようないつも貞節で美を求めて手を伸ばしている女が、地上で最も純粋で美しい女に見えてくるのだった。

官能の真の満足を得られないことが分かると、彼はそのすべてにうんざりして、不潔なものとして軽蔑するようになった。ハーマイオニと美や思想を語り合うことの不毛さが分かってくると、それについても、辛辣に、鼻で笑うようになった。

そして、自分が今にも、くず折れ、モノと化し、全体性を失うか、発狂しそうなことが、分かった。闇から光へ、光から闇へ、意味も理屈もなく、ほとんど機械的に揺れていた。

社会的美徳の中心たるハーマイオニと、犯罪すれすれの反社会的な売女（ばいた）との間で、極端に揺れた。その揺れから自分を守る術（すべ）を持たないことが、最も辛く、耐え難かった。拷問のようなジレンマだった。最後は、度を超えた両極間の揺れのストレスで、心が壊れて死に至るか、最悪の場合、目的や全体性を失った崩壊した動物になるかだった。そのことが分かっていて、恐怖に慄（おのの）いていたが、それでも、自分を救えなかった。

自らを救うためには、自分の中の精神性と官能性を統合する必要があった。だが、すぐに、意志の力で、できる話ではなかった。それ以外の力が発動しなければならない。バーキンはハーマイオニとの関係で、心の交流に加えて、官能的交流を意志した。意志することはできたし、意志どおりに動くことはできた。しかし、求めるものは結局、得られなかった。人は自分の中に欲望を創ることはできない。意志の力で欲望を止めることもできない。どんな形の欲望であれ、それの根源性と比べれば、意志はたかだか二次的な、派生物だった。意志には、破壊はできても、創りだすことはできなかった。

強いて、ハーマイオニに感覚面で近づこうとすればするほど、惨めな気持ちになった。他の女との放蕩についても、誇り高い彼は、自分で自分を蔑んだ。結局、それは彼が欲するものではなかったのだ。心の底では、蕩児の快楽を望んでいなかったのだ。彼の欲望の根本は、一つだけの行いを通して、すっかり愛せるようになりたいという思いだった。欠けるところのない女と、身も心も一つになりたかった。

この欲望が達せられなかったのだ。常に、あれかこれか、精神か感覚か、という二者択一だったが、どちらかだけでは、死と同じだった。すべての歴史、ほとんどすべての芸術は、人を死に至らしめるこの「半分だけの愛（ハーフ・ラヴ）」の証人だ。クレオパトラのような情熱か、ベタニアのマリア（『ヨハネ福音書』第一一―一二章に出てくるイエスの足に香油を塗った女）やヴィットリア・コロンナ（一六世紀イタリアの女詩人）のような精神性か、二つに一つだ。

彼はこの問題を延々と考えた。自分がどう反応するのかもよく分かった。だが、自分のことが分かればいいという問題ではなかった。考えることで、人の背が伸びるわけではない。ただ、身長という名の自己の限界を知るだけだ。

どの女も愛していないし、何をしても自分が自分らしく本当に満たされることはなかった。心に何かが閃き、興奮して、人類の救い主のように、思いの丈を語りたくなることもあったが、そんな時でも、彼の中には、自分の正義感や精神性をあざける力があった。そのすべてを率直に、精確に、愚弄することができた。彼の嘲弄は、あまりにも的を射ていて、自分自身の正義漢ぶりをこてんぱんにして、その燐光放つ腐臭を露わにした。同様に、官能の疼きに震えて絶頂に達しそうになると、頭の中の冷たい声が、「あなた、本当に熱くなっていませんね。さっと立ち上がって、この喜びの場から、冷然と立ち去ることだってできますよね。この喜びは大したものではありません」と呟くことがあった。

たしかに、これまで愛したことはなかったし、今も愛することができなかった。与えられた条件の下で最善を尽くすしか手はなかった。精神と感覚の二つを別々に扱い、どちらに対しても、落ち着いて、冷静に、対応する。だが、彼は、そのようなやり方を、潔しとしなかった。「おれは、ネッカン（マシュー・アーノルドの詩に出てくる海の精）のように、魂を持つことができないのか」と独りごちた。透き通った悲しそうな生き物が魂を求めて夜も昼も見つめつづける物語をじっと思った。

こうして、彼の悩みはつづいた。日ごとに、頬がこけ、血の気が失せ、空虚な骨だらけの亡霊じみていった。くず折れる日がさほど遠くないのは自分でも分かった。

その間中ずっと気づいていたことがあった。彼はいつも女性に惹かれる質で、男よりも女と一緒の方がくつろげたが、同時に、急に火がついたような興奮を感じるのは、男に対してだった。通常なら異性に対して感じるような魅力を、彼は同性の男に対して感じるのだった。心を通わせるようなやりとりはほとんどいつも女性との間で、必ず女の親友が一人は

いるタイプだった。男とは決して親交を結ばなかった。それなのに、夢中になるのは男の体だった。女の体を好きになることはあっても、それは姉や妹を好きになるような神聖な魅力だった。

街中で、ふと惹きつけられるのは、男の体とそのきびきびした男らしい動きで、それはその男の性格とはまったく関係がなかった。女性に対しては兄か弟のような気持ちで観察して、彼女らの気持ちや意向を忖度(そんたく)した。謎であり情熱の対象になるのは、男の体だった。女は、同類のように感じて、彼女らの魂を求めた。街中で彼が観察するのは、女の魂と男の体ということになった。

これが新たな苦しみの源になった。どうして、自分は、女の顔に、男と同様の魅力と美しさを感じられないのだろう？どうして、男の美しさはこんなに強く彼の心を酔わせるのに、女の美は、どこか実体がなくて、その視線や物腰や直観の啓示に限られるのだろう？　彼が女を美しいと思うのは、その表情以外の何物でもなかった。しかし、男の美しさはその体形の美であり、筋肉の形や動きそのものだった。

彼は女を愛したいと、ずっと思っていた。その間中ずっと、ハンサムな男にしばしば感じるような熱愛的魅力を、美しい女に対して感じたいと思っていた。だが、できなかった。女性だと、精神的な兄弟姉妹愛の要素があふれてしまった。あるいは、その反動から、獣じみた非情の肉欲しか感じなかった。

袋小路のようなジレンマだった。自分の気持ちを作ることは、人間にはできない。無理な話だ。だが、生まれた気持ちを抑えることはできる。意志という名の鎖で縛りあげてしまうのだ。しかし、そうなると、抑えつけることは単なる生の否定、生きることの拒絶と変わりなくなる。

情熱に燃える友情の経験はあった。相手は、さほど知性はないけれども容姿の美しい男だった。血色が良く、元気に育った、親切心あふれる、気のいい男たちだった。体の弱いバーキンを女以上にやさしくいたわってくれた。その男らしい

肢体の美しさに、バーキンは喜び、震え、彼を愛した。男を愛撫したいと思った。

だが、鉄の鎖ほどに強い自制心ゆえに、バーキンが自分の気持ちを相手にはっきり示すことはなかった。それに、熱く熱く愛したその男と少しでも会う機会がなくなると、バーキンは男のことを忘れた。後光が差してみえるようだった相手のかがやきが失せて、男のことを退屈な友達としか思い出せなくなった。また、彼の元に戻り、否応なく、相手の知性のレベルに合わせて、退屈な会話をするのは無理な話だった。吹き消したろうそくを今更思い出さないように、バーキンは男友だちをすっかり忘れた。相手が愛に近い真に温かい気持ちを彼に抱きつづけていたとしても、バーキンにとっては、すでに、自分とは違う世界に生きて、自分とはまったく繋がりを持たない退屈な部外者になっていた。彼は、彼に忠実なこの愛に、わずかばかりの関心も払わなかった。それは何の価値もない、無に等しいと、心の底から感じていた。

こうして、昔の友だちとすっかり縁を切った。ダビデがヨナタンを愛したように熱愛した相手に対しても同様だった。早く会いたくて居ても立ってもいられなかったのに、相手の肩に触れると愛の震えが全身を駆け抜けたものだったのに、今では、レストランで給仕するするウェイター同然の存在しないに等しい形骸になっていた。

そのことに少し驚く気持ちがないではなかったものの、ほとんど考えずに脳裏から拭い去った。それでも、時折、どこかで男を見かけて、熱い欲望におそわれるのだった。新しい恋人と親しく交わり、愛を告白して、楽になりたかった。

どこで、その男に会うのか、予測がつかなかった。道を訊いた警官が不意に顔を上げて彼を見た時に何かが起きる場合もあれば、汽車で隣に座った兵士にはっとすることもあった。ロンドンのチャリング・クロス駅からウェスタハムまで行く列車の中で、彼に体を押しつけるように座っていた兵士のことは、何カ月経っても、まざまざと思い出された。形の整った不動の体のたくましい膝の上に、大きく無骨で美しい物言わぬ手が所在なげに置かれていた。背筋を伸ばして座る男の濃い茶色の瞳がはかなげに見えた。フランネルの肌着姿でマーゲートの浜辺にいた、黄褐色の日に焼けた若者は、二十

三歳のヴァイキングみたいに、子供たちと遊んでいた。すっきりとした丸みを持つその体の線は雪のように清らかで、カモメや熱くなった白熊に似た世離れした集中力を見せて、砂のお城を作っていた。

バーキンは、そのような幾人かの男たちを覚えていた。話すこともなかったのに、彼の感覚に忘れがたい啓示を残した男たち、彼を陶酔させ彼の血が知っている男たち。彼らは、大体、二種類に分かれた。一つは、肌が白く、鋭い四肢を持ち、青い閃光を放つ氷のような瞳に、冬の日差しの結晶のような髪の、空気を引き裂いて鳴くカモメのように人間離れした北方人で、つららのように毅然として、水晶のように孤高を守っていた。今一つは、その中に飛びこんで泳げそうな黒々としたうるんだ暗闇の瞳の、浅黒い肌としなやかな体をそなえた、夜の匂いを放つ男たちで、粘り気ある重く遍き闇の世界を現出させていた。

バーキンの感覚は、これらの男たちに強く惹きつけられた。二つのタイプの非の打ちどころのない美しい典型のような男たちに彼は惹かれた。男たちを観察し、感覚を通して理解することで、彼は彼らを知った。彼らの血そのものを知り、彼らの重さと味を知った。北方人の血は、軽く、赤く、ピリッとした味だった。クランベリーのような鼻をつく強い酸味のあることも多かった。浅黒い肢体の男の血は、重く、こってりと味わい豊かだった。しまいには、胃にもたれて、吐き気をもよおした。

バーキンは、二十八、二十九と年を重ねて、だんだん枯れてくると、欲望も静まってきて、こういう二種類の男たちを求めなくなることがあるのだろうかと、しばしば自問した。すると、顔から血の気が引いて、暗然とした。男の魅力の桎梏から逃れることは決してないような気がしたのだ。

欲望に屈するのも、とても無理だった。自分の気持ち、自分の熱情に押し流されるのは絶対に嫌だった。これは仕方ないことなのだ、こういう男の体を抱きたいという強い欲望を感じるのはいいことなのだとは決して思えなかった。生きた

肉体の、万年雪のような永遠の光だったり異臭を放つ重い闇の流れだったりする、こういう男の体におぼれたいという熱情を、どうしても認めることができなかった。

こういう欲望は投げ捨ててしまいたかった。こういう欲望を知りたくなかった。だが、体が暑さや寒さを感じるのを止められないのと同様に、自分の中にある生きた欲望を殺すのは不可能だった。せいぜい、できるのは、自らを桎梏の中に投げこみ、欲望の成就を妨げることだった。だが、血液が否応なく体内を駆けめぐるように、欲望も生じるべくしてそこに生じ、肉体の死を迎えるまで、満たされることを求めつづける。

こうやって、何カ月も、何年も、引き裂かれた状態のまま、いつか、男の美しさに強く惹かれることがなくなり、女の美に夢中になれる日が来ないかと、もがいていた。

だが、その日は近づくどころか、遠ざかっていった。心の奥では、ずっとこのままではないのか、もう自由になれないのではないかと、怖れていた。自分の人生は、生来の欲望や生来の自分との長く苦しい戦いに終わってしまうのではないか、と怖れた。このように引き裂かれているのは耐え難かった。生きている意味がなかった。

反社会的な、恥ずかしい愛を抱く女に、激しくおぼれてもみた。そうすると、自分が男に惹かれることを、長い間、忘れられた。すっかり忘れられた。すると、自信がついて、強くなった気がした。

だが、それでも、戻ってくるのだ。たとえば、レストランに、コーンウォール（イングランド南西端の州で、エキゾチックな「ケルト」文化の伝統を持つ）によくいるタイプの一風変わった男が入ってきたりする。顔に穴が開いたような黒い目と言えばいいのか、それとも、ドブネズミみたいな目と言えばいいのか、その目の上は、細く固めの黒髪で、重く量感のあるしなやかに強い四肢を持つ男だ。すると、バーキンは、自分の内側で、また欲望が躍りあがるのを感じるのだ。この男を知りたい、この男を食べるように自分のものにして、味わい尽くしたいと思うのだ。この強くしなやかな体つきの男が、ウサギ

のように、少しこそこそと、奇妙な食べ方をするのを見ると、バーキンは、これこそが自分の求めているもののように感じて、胸の内に熱い興奮が燃えあがるのを感じるのだ。あたかも、自分の欲望の満足の鍵は、この真正面に見えるたくましい若者にあると言うかのように。

すると、心の奥で、絶望に似た気持ちがおこった。男への熱い欲望がまた起きてしまったのだ。彼は深く落ちこんだ。ずっと男を愛してきたし、ずっと男しか愛してこなかったような気分になった。彼の最大の苦しみはそこにあった。

だが、それは事実とはちがった。男のことを、何週間もすっかり忘れていることもあった。その間は、男の豊かな体に対する熱い讃仰の念が消えた。何週間も、自由な気分で、生き生きと、色々なことをした。だが、自分の気持ちや欲望を心底怖れていたので、男への疼きが戻ってくると、のびのびできた時のことは脳裏から拭い去られて、その桎梏と苦悶が延々とつづいてきたかのように思われた。

見かけた男に不意に発作的に熱く惹かれるというこの秘密だけは、誰にも明かさなかった。自分自身にさえ、秘密にしておこうとした。自分の気持ちには気づいていたが、その自覚をずっと閉じ込めておいた。すぐに「こんな気持ちになっちゃいけない」、「こんな感情を持つのは、ぼくに欠陥があることの究極の証左だ」と思った。だから、すべてを認めていたにもかかわらず、疑問を直視できなかった。絶対に、その欲望を受け入れなかった。それを自分の一部として認めまいとした。常に、それを無いことにしようとしていた。(1)

ジェラルド・クライチこそ、バーキンが最も強く、熱く、一気に惹きつけられた相手だった。恋に落ちると、バーキンの目に映るジェラルドの姿が一変した。きらきらと光りかがやく魅惑的な美しさが脳に焼きついた。ふたりの男は一度か二度会ったきりで、その後、ジェラルドはイギリスを出て、南アフリカに行ってしまった。バーキンは彼のことを忘れて、ふたりの繋がりはすっかり死に絶えた。だが、すっかり死んではいなかった。ふたりの中には、あの燃えあがりやす

い強い親和力の種子が眠っていた。

だから、バーキンが、一緒に休みに登山したホスキンとジェラルドの姉妹ローラ・クライチの結婚式に、新郎付添い人として出席することを約束すると、かつての愛情があっという間によみがえった。ジェラルドはどんな男になっているだろうとバーキンは想像した。

ホスキンがバーキンに付添い人を頼んだのを聞いて、ハーマイオニも、即座に、ローラ・クライチの新婦付添い人になる約束を取りつけた。避けられない流れだった。彼女とルパート・バーキンの友情関係は終わりに近づきつつあった。今では、彼が三十で、彼女は二十九だった。ハーマイオニに対して抱く彼の敵意は、日常的嫌悪と化していた。それでも、彼は彼女のものだった。だが、女の支配力はどんどん弱まりつつあった。「逃げ出したら、バーキンは地獄に落ちるわ」と彼女は言った。

それでも、逃げ出すのは時間の問題だった。ハーマイオニに対する反発心が、今では人生最大の動きになっていたのだ。彼女と戦い、彼女を向こうに押しやって、自分自身もその桎梏から解き放とうとしていた。ただ、彼には、彼女の他に頼るものがなかった。彼にとって唯一の礎（いしずえ）である女から逃げ出すことは、底なしの海に落ちてゆくことでもあった。

注

（1） この箇所について、初出の『テキサス・クォータリー』版編者ジョージ・H・フォードの興味深いコメントがあるので、以下に訳出する。

「本「プロローグ」はある時点ではここで終わっていた。というのはロレンスの手稿の次の頁には「第二章　結婚式」という見出しが書かれていたからだ。だが、この見出しは後に消され、「このまま続けること」という指示が二回挿入されている。」